

近世期尾張方言における打消推量・打消意志の助動詞マイについて

湯 浅 彩 央

一 本稿の目的

湯浅（二〇一七）において地方の方言資料に中央語である江戸語がどのぐらい受容されているのかを考察した。その際、近世期尾張方言資料に〈打消推量マイ〉の

○身仕まいもすさまじい一寸顔見せても疵もつかまい

（永州↓お糸『天』三三三頁上）

がみられた。中央語である江戸語・上方語のマイの接続は一般的に終止形接続であり、未然形接続のマイの用法が尾張方言の混入か、江戸語に対する誤った認識なのかという課題が残った。本稿はその打消推量・打消意志のマイにおける尾張方言の実態に迫るものである。

尾張方言に関する先行研究において芥子川（一九七一）は、打消推量・打消意志・誘引（本稿では「勧誘」とする）の用法としてマイが用いられると指摘し、個別の例を詳細に説明するものの、資料別の実態も全体の用例数（使用率）も不明である。また芥子川（一九八三）では勧誘表現において明治以降に愛知県の東

西で接続形式が大別されるとし、終止形接続は尾張地方に、未然形接続は三河地方に使い分けられると指摘したうえで「江戸末期になって、稀にイコマイカの形があらわれているばかりである。（三六頁）」と述べる。四段活用と一段活用のいずれにも勧誘用法において未然形・終止形接続があるのか、その他の打消推量・打消意志用法はどうであるのか不明な点が残されたままである。そこで本稿では、尾張洒落本においてマイがどのような実態であるかを記述し、その課題を考察することを目的とする。

二 調査資料

本稿の調査資料は、いずれも筆者は名古屋人かそれに類する者であり、庶民を描く洒落本と、遊里を描く洒落本の二種類を取りあげる。これにより、いくらか位相的な考察が可能になると考える。調査資料は以下のとおりである（資料名、年代、作者、体裁・翻刻本の順に記す）。

〈庶民を描く洒落本〉

囲多好髻^⑤

寛政一二年

爰乎翁斎

洒落本大成一八卷

女楽卷 寛政一二年か 料理蝶齊 洒落本大成一八卷

新織舞意鈔 寛政一三年 椒田楽 洒落本大成二〇卷

通妓洒見穿 文化一〇年 南瓜鳶人 洒落本大成補卷

春遊南詞一夢 文化一〇年か 五面斉真平 洒落本大成補卷

〈遊里を描く洒落本〉

濁里水 明和元年 雅笑子

軽世界四十八手 寛政一二年 有雅亭光他 洒落本大成五卷

指南車 享和二年 石橋庵真酔 洒落本大成一八卷

駅客娼穿 文化一年 模积舎 洒落本大成二二卷

蓬駅妓談 文化二年 作者不明 洒落本大成二三卷

南駅夜光之珠 文化四年 彙斎主人 (石橋庵真酔) 洒落本大成二四卷

夢中角庵戲言 文政二年 雲照庵宝山 洒落本大成補卷

右記の資料は、資料数において庶民を描く資料が不十分であるが、尾張方言におけるマイの実態を記述する機会ととらえ、ひとまず試みる。

次節ではマイの使用実態を概観する。

三 調査結果

表1は、打消推量・打消意志形の未然形接続、終止形接続別にまとめたものである。空欄はゼロである。

まず四段活用他と一段活用での接続形をみると、四段活用他は未然形および終止形接続の両形が確認できるのでに対し、一段活用は全て未然形接続であることがわかる。本稿調査資料における尾張方言において一段活用は未然形接続のみで終止形接続は認められなかった。芥子川（一九八三）に言及される三河地方の未然形接続は近世後期の三河方言資料の調査を俟ちたい。

また本稿の考察は打消推量と打消意志を中心としているため、まず禁止用法と勧誘用法を押さえていく。

三・一 禁止用法

禁止用法では全資料で一一例得られた。以下、用例をあげる（傍線は筆者による）。

① ハイ何か出さんならまい
（『舞』おゆり↓小きん 二四六頁）

② しかしそいつをけすにはろせうでもかけづは行まい
（『蓬』松兵衛↓お梅 一六四頁）

③ これ勘七さっきのことわすれまいぞ

（『夢』こう山↓勘七 四五二頁）

①②は現在で言うところの「出さなければいけない」「馴染みとなった客への気持ちを表現で入れた入れ墨を消すには」かけな

表 1：出現数

	作品名	動詞別	未然形接続				終止形接続		
			意志	推量	禁止	勧誘	意志	推量	禁止
庶民	囲多好鬻	四段他		1		1		1	
		一段活用							
	女楽巻	四段他				1			
		一段活用							
	新織御意鈔	四段他		1	1	1			
		一段活用		1	1	3			
	通妓洒見穿	四段他	1	5					
		一段活用	1	3					
	春遊南訶一夢	四段他							
		一段活用							
遊里	濁里水	四段他							
		一段活用		1					
	輕世界四十八手	四段他				5		1	
		一段活用	1						
	指南車	四段他	1			3		4	
		一段活用				2			
	馱客娼穿	四段他		3		1	1	3	
		一段活用	1	1					
	蓬馱妓談	四段他						6	1
		一段活用	1		2	2			
	南馱夜光之珠	四段他		3			1	2	
		一段活用							
	夢中角庵戲言	四段他		3	2	1		1	
		一段活用	1	2	4	1			

ければいけない」という当為表現にあたる。話し手もしくは聞き手に対する義務を表している。厳密には禁止用法とはいえないが、意味の面において類似しているため、ここでは禁止用法に分類した。なお、四段他活用禁止用法の三例はいずれも当為表現であり、②も終止形接続ではあるものの当為表現である。

対する③は聞き手に対して「決して忘れるな（忘れてはいけない）」と命じる意味である。四段活用では『夢』に未然形接続の「言わまいぞよ」、一段活用は「わすれまいぞ」『儼』『夢』の三例、「しそんじまいぞ『夢』」、「とめまいぞ『夢』」の二例がある。以上のように、禁止用法は当為表現および「動詞＋マイ＋ゾ」形で相手に「ゝするな」と命令する際に用いられることがわかった。

三・二 勧誘用法

続いて勧誘用法をみると、禁止用法より多い二二例みえ、とりわけ遊里を描く資料に多用されていることがわかる。用例をみよう。

④ ウムサア出^でかけまいか 小きんさから遣^{つか}がきた

（『儼』 仁九良↓娘おきん 一三五―一三六頁）

⑤ 且方でも三宝でもゑい^{ゑい}わのサアあがらまいかや

（『輕』 珍海↓和同 三五八頁）

⑥ 定公どふでやもふいかまいかとん^{とん}とよいころになつた

（『指』 寸伯↓定次郎 二八五頁）

⑦ それはともあれもふかへらまいかへ

（『指』 寸伯↓定次郎 二八五頁）
⑧ そのせんさくはあすの事にしてもうねまいか

（『蓬』 弥平↓すかん・勘八 一二四頁）

④―⑧の用例をみると、出かける、上がる、行く、帰る、寝る等の動詞のいずれも未然形にマイが接続している。かつ、これらは話し手が聞き手に共に「出かけないか」「上がらないか」等と誘いかけており、尾張洒落本における勧誘用法はもっぱら未然形接続で語尾に終助詞力を付すことがわかる。また、庶民を描く資料より遊里を描く資料に多用されるのは、場面が接待を伴い、また複数人が登場し、話し手が聞き手に行為を誘いかけやすいことに起因していると考えられる。

ところで、芥子川（一九七一）に未然形接続と終止形接続について重要な指摘がある。少し長いが引用する。

江戸時代後期においても、この種の誘引表現は「やらまいか」が主流であつて、「やろまいか」の類はきわめて劣勢であつたとみなければならぬ。

しかし明治以降は逆に「いこまいか」「やろまいか」が主流となつて「やらまいか」の類は片隅へおしやられ、昭和の今日ではほとんど絶滅したといつてよい。三河地方では、今もなお「やらまいか」の形が存続されており、現在では一見、名古屋（尾張）と三河の間において「やろまい」と「やらまい」の差があるように見えるが、江戸時代においては全く同一であつたのである。

そうになったのも、あるいは関西系の言葉の流入の度合が尾張と三河とで多少の相違があったためかもしれない。

(略)

四段活用動詞の終止形に「まい」が直結した形で、江戸時代の名古屋では珍しいものである。

これについては、江戸後期の名古屋においても、第一人称の打消推量(意志)の場合は、(略)四段活用動詞についてはいずれも終止形に「まい」が接続するという定法を厳守していることを想起しなければならぬ。

その影響で第二、第三人称の打消推量の場合にも原則的には「あらまい」である中にわずかながら「あるまい」と終止形に接続した例があらわれている。

それと同様に、この誘引表現の場合にも、「かへるまいか」「あがるまいか」という終止形統の形があらわれたとしても不思議でない。

主流はあくまで「かえらまいか」であって、「かえるまいか」は、特例としなければならぬ。(二七三—二七四頁)

打消意志・打消推量は後に取りあげるのでひとまずおくが、一人称の打消意志、打消推量を介して勧誘表現においても四段活用動詞が未然形接続から終止形接続へと変化するといえるのである。では、本稿調査において勧誘表現は四段動詞他もいずれも未然形接続であることをどのように考えればよいだろうか。これについては四節にて改めて考えたい。

また、勧誘とは異なる依頼表現ともとれる用例が七例認められた。なお、この用法は表1には記載していない。

⑨ フン喜兵衛さのことか

アイできまいか (『女』おさわ↓おまつ 三三九頁)

⑩ これそこらに蒸菓子あらまいか (『軽』歌蔵↓下女おきさ 三五五頁)

⑪ ほんにモウ一ッへん火にあて、おかまいかの (『駅』亭主↓料理番 二一九頁)

⑫ ひさしふりとひとつあげまいかト盥をける

はいと二盥うけてのみまたあげるぞな

(『夢』こう山↓お糸 四六〇頁)

⑨—⑫は勧誘ではなく、⑨「できませんでしょうか」、⑩「ありませんでしょうか」、⑪「あてておきましょうか」、⑫「あげましょうか」と解される用法である。芥子川(一九七二)にもこの用法をあげ、「いずれも一段活用動詞の未然形に接続した例であるが、(略)ていねいな依頼の意である(二七四頁)」と述べる。

⑨⑫は一段活用ではあるが、⑩⑪は四段動詞であり、一段活用に限らず広く用いられていたことが本調査で明らかになった。

三・三 打消意志用法

表2に庶民・遊里を描いた資料別の打消意志・打消推量の用例数を示した。この表から打消推量は未然形接続、終止形接続共に使用例が多いのに対し、打消意志では未然形接続が多く、終止形接続は少ないことが明らかになった。実際に用例をみてみよう。

表 2：庶民・遊里別使用数

		未然形接続		終止形接続	
		意志	推量	意志	推量
庶民	四段他	1	7		1
	一段	1	4		
遊里	四段他	1	9	2	17
	一段	4	4		

頁)

①⑦女郎衆もおちやを挽た時は消たかろうさ

しかし其いくらひでやなけらにや客を大事にせまひてなん

〔通〕道則↓梅春 四〇九頁)

①⑧このふりで弦^ひかかれもせまいがホシニおめいのようふな海り

やうが其くらいとはおそれるネイ

〔通〕梅春↓白雪 四〇九頁)

⑬―⑱と少ない例ではあるが、終止形接続の四段動詞は「話す」「言う」という話し手の発話行為を表す動詞である。一段動詞は「おかれる（おくの可能形）」「出る」等である。いずれも

⑬しんたらま、よそこはなせどふあつてもはなすまひ

〔駅〕うば↓古手屋八郎兵

二三〇頁)

⑭ラツトみなまでいふまい

〔南〕喜三↓おこと・お梅

二八九頁)

⑮おまいさんのであつたかあげずにもおかれまい

〔軽〕女房↓金子屋多九良

三四八頁)

⑯こんどきたときでまいといは

まいぞよ

〔夢〕勘七↓おとま 四五五

話し手の意志および聞き手の立場に立った代弁の場面で用いらている。また⑰⑱のサ変動詞は本稿調査では未然形接続のみである。

先述した芥子川（一九七一）の打消意志用法を介して勧誘用法において四段動詞他は未然形接続から終止形接続へと接続形式を変化させたと考察されるが、本稿調査においてはサ変動詞を除く四段動詞は打消意志用法では全て終止形接続である。それに対して勧誘用法は未然形接続のみであり、変化の過程としては速すぎるように思われる。打消意志・打消推量の四段動詞他は未然形・終止形と揺れているのに対し、勧誘のみ寛政から文化文政期まで一貫して未然形接続のみとは考えにくい。この点に関しては、第四節で改めて考察する。

次節では、打消推量を考える。

三・四 打消推量用法

表 2 に示したとおり、打消推量用法は、一段動詞を除く四段動詞他は未然形・終止形の両形に接続し、またマイ全体においても中心的な用法である。まず未然形・終止形の両形式に接続する四段活用動詞の用法をみよう。

⑰なにおつせるちゃだあれもおいでせんはあもし

そうもあらまいがや 〔罍〕居隠↓お東 三〇五頁)

⑱ゆうてをくれるばやいでもあるまい

〔罍〕下女おきよ↓およし 三〇七頁)

⑲又久やろふの方へのかをもたつまいく

〔蓬〕 松兵衛↓お梅 一六四頁

②② なんのというてえいもうくく腹がた、まいことか

〔夢〕 おとま↓勘七 四六六頁

①⑨—②②にあげた用例は未然形・終止形両形式に接続する動詞類である。本稿調査内では「ある」が最も多く、「あらまい」が三例、「あるまい」が九例用いられている。これは庶民・遊里を描く資料ともに用いられるため、位相の違いとは考えにくい。

このほか、四段活用動詞他の未然形接続形式と終止形接続形式をあげる。未然形接続形式は「知らまい」「指」「南」「変わらまい」「駅」「あたらい」「夢」等がある。終止形接続形式は、「たまるまい」「軽」「いざりますまい」「指」「蓬」「おくんなすまい」「蓬」「叶うまい」「蓬」等である。終止形接続が多い一因としては丁寧の補助動詞「なんす」「いざります」があげられよう。ルビが付されておらず、読み方が不明な用例を除き、全てこれらは終止形接続である。なお、同様の「なはる」は未然形接続の「知りなはれまい」「通」のみであるが、丁寧表現は「なはる」より「いざります」、「なんす」が多用されているため、とりわけ遊里を描く資料において終止形接続の用例数が増えたと考える。

なお、サ変動詞は

②③ ぬれたばかりでやぶれやせまい

〔舞〕 下女おりん↓子守おみよ 二四〇頁

のように、打消意志用法同様、未然形接続のみである。そして一段活用は例は

②④ めつたにほめまひ此太郎も大ぶんなが多い

〔水〕 ワル口↓ 三四四頁

②⑤ お客がまだみへまいノ〔舞〕 御新造↓小僧 二二三頁

②⑥ 山桜と久しひ洒落もいわれまい時に…

〔通〕 道則↓梅春 四〇七頁

のように「ほめる」「みえる」「言われる」「知りなはる」「気がしれる」「死ねる」である。

次節では、先に触れた未然形接続・終止形接続の打消意志・打消推量・勧誘・禁止との関わりについて考える。

四 未然形接続と終止形接続のマイ

前節では近世後期の尾張洒落本におけるマイについて用法別に概観してきた。一段活用およびサ変動詞はいずれも未然形接続のみみられた。本節では四段活用動詞他の未然形接続および終止形接続について考察する。まず先行研究の見解をまとめる。

芥子川（一九七二）は、「行かまい」「やらまい」形を「動詞＋推量の助動詞ウ＋マイ」の構成をもつ「行かうまい」「やらうまい」等、アウヴァーとなり、その後母音の短呼現象により「行かまい」「やらまい」となったと解釈している。

彦坂（一九九七）は、藤原（一九五五）に倣い、助動詞ベイ・マイの接続に着目し、両助動詞はかつて終止形接続であり、中世の連体形・終止形同化の頃に接続面の揺れが生じ、未然形接続となったのが続いた可能性が高いと示唆される。

芥子川氏の推論は推量ウの介入と母音短呼の結果は説明として明快ではあるものの、上方（とりわけ大坂）語の影響とするには

説明が弱いと考える。

本調査でマイ全体を考える際、サ変動詞・一段活用動詞を除く四段活用動詞においてのみ未然形・終止形が認められ、その用法は打消推量・打消意志である。彦坂（二〇〇九）の『方言文法全国地図』の分布、および『新日本言語地図』⁸の分布をみると、両表現において愛知県はイカンダラーやイカヘンのような否定表現をメインとした形式が用いられ、マイ類は勧誘用法にイカマイカ・イクマイカ・イコマイカがみえる。ということは、文献資料においても、明治期以降は打消推量・打消意志用法が漸減し、勧誘用法が増加するのかもしれない。

ところで、筆者が最も注目するのは（用例再掲）

②しかしそいつをけすにはろせうでもかけづは行まい⁹

〔蓬〕松兵衛↓お梅 一六四頁

の禁止用法である。湯浅（二〇一九）では中央語である近世後期以降の上方語・京阪語、江戸語・東京語のみならず、尾張方言においても二重否定の当為表現（くナケレバナラナイ）の変化を検証してきたが、ユ（イ）クマイはこの一例のみである。元来当為表現は二重否定表現であるため、否定助辞で結ばれるため、もともとマイの出現が少ない。しかも「未然形＋マイ」と固定化された形式での使用であるため、ほとんどがズバナルマイである。しかしこの用例はわざわざルビを施して終止形接続であることが示されている。

加えて勧誘用法において芥子川説にたつと、本稿調査において終止形接続形式が散見されないのが疑問である。⁹やはり彦坂（一

九九七）の指摘するベイとの接続面を考慮するとイ（ユ）クマイは自然である。

また、江戸語の影響も気になる。本稿ではさらなる用法に言及できないため、この問題は課題としたい。

五 まとめ

本稿では近世期尾張洒落本におけるマイの実態を概観してきた。洒落本という資料性を考慮すると、上方語の影響が強いものの、以下のような傾向が見いだせた。

○禁止用法は当為表現に四段活用動詞が未然・終止両形式がみえるものの、「くするな」形式は未然形接続のみである。

○勧誘用法および丁寧な依頼用法はいずれも未然形接続であり、依頼用法には従来一段活用のみと目されていたが、四段動詞にも使用が認められる。

○打消意志は、サ変動詞、一段活用動詞は未然形接続のみで、四段動詞は終止形接続にわかれた。ただし用例は少ない。

○打消推量もサ変動詞・一段活用動詞は打消意志と同様であるが、四段活用動詞は未然形・終止系接続ともに用いられ、庶民・遊里の区別は見いだせない。

本稿は調査資料に洒落本のみを用いた。筆者はこれまで洒落本・滑稽本・人情本を多用しているが、著者や資料ごとの特徴が大きく異なる。やみくもに調査範囲を広げるのは慎まねばならないが、幅広い資料を探索し、実態に迫りたい。

注

- (1) サ変動詞においては「せまい（未然形接続）」「しまい（連用形接続）」がみえるが、他の動詞類は概ね終止形接続である。
- (2) 芥子川（一九八三）では三河地方において一段活用「見る」にミマイカと未然形接続形式をあげる（二三五頁）。
- (3) 彦坂（一九九七）によると、庶民を描いた洒落本では資料間の差異があまり大きくなく、今日の方言にも通じる点が多いのに対し、遊里を描く洒落本は資料間においてかなり差異がみられること、また遊女と客の人物像が江戸風である（江戸洒落本の模倣によるため）など、その扱いには注意を要する。
- (4) 論証に支障をきたさない範囲で文字の大きさや字体などを一部変えている。
- (5) 本文にて用例をあげる際に資料名を略して記載する一字である。
- (6) 調査においては漢字にルビが付されず、未然形接続か終止形接続か不明な次のような例は除いた。
○でけたおぐしがよふあがつたときになんといのふじや有まいか
○夫じゃさっぱり気が付まい
また、括弧内は資料名、話し手↓聞き手、当該頁を示している。
- (7) 矢島（二〇一三）は当為表現を肯定的当為表現、禁止表現を否定的当為表現に大別している。双方類似の意味用法である

- ことが示されよう。なお、当為表現は「否定助辞条件句＋ならない」であり、禁止表現は「～テハ＋ならない」と前項部に条件句、後項部禁止表現と形式と用法共に類似している。
- (8) 『新日本言語地図』とは、国立国語研究所の共同プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査（研究代表者・大西拓一郎氏）」で、二〇一〇年から二〇一五年にかけて全国五五四地点において二二一の項目を調査している。取りあげた地図は一二五図「たぶん行かないだろう」（打消推量）、一二九図「いっしょに行こうよ（勧誘）」一三〇図「もうそんなところへなんか、けっして行くまい」（打消意志）」の三図であり、地図・分布概要は船木礼子氏による。
 - (9) 芥子川（一九七一）の用例に挙げられる『うかれ鳥』について、彦坂（二〇〇九）においても終止形接続の用例（『うかれ鳥』は「尾張方言と京・江戸語の混在で資料性が劣るため、方言例とすることはためらわれる。他の尾張戯作類にこうした終止形承接例はまずない（三〇頁）」と述べる。

参考文献

- 大西拓一郎編（二〇一六）『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店
- 芥子川律治（一九七二）『名古屋方言の研究』泰文堂
- 芥子川律治（一九八三）『愛知県の方言』講座方言学六 中部地方の方言 国書刊行会
- 橋本四郎（一九五五）『ベシ・マジの接続面の混乱』『国語学』第

二二号

彦坂佳宣（一九九七）『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院

彦坂佳宣（二〇〇五）「東海・ナヤシ地方の勧誘表現」『名古屋・方言研究会会報』第二五号

矢島正浩（二〇一三）『上方・大阪語における条件表現の史的研究』笠間書院

山口堯二（二〇〇一）「「まい」の通時的变化」『佛教大学文学部論集』八五号

湯浅彩央（二〇一七）「地方洒落本のなかの江戸語―尾張洒落本を例に―」『湘南文学』第五二号

湯浅彩央（二〇一九）『近代日本語の当為表現』武蔵野書院
(ゆあさ・さお 本学准教授)